2008－CG－130 (18)
2008／2／19

ビジュアル情報処理研究合宿2007の開催報告

南原哲幸[†1] 手島知昭[†2]

本稿では2007年9月22日—24日の間に行われた第7回ビジュアル情報処理研究合宿(以下，本合宿)の開催報告を行う．本合宿は学生同士の人脈作りと発表に対する苦手意識の改善を目的として掲げ，独立行政法人国立女性教育会館にて2泊3日の日程で行われた．本合宿ではポスタ発表・登壇発表・懇親会・レクリエーションを行い，大学の枠を超えた学生同士の議論と交流を図った．また新しい試みとして，国際会議の参加経験が少ない学生に対して疑似体験の場を提供するために，ポスタ発表において英語セッションを企画した．合宿開催前には参加者同士によるグループワークを企画し，学生同士の積極的な交流を促した．今年度から有志による学生運営委員会を発足し，Web上での議論を進め合宿の運営を行った．その結果100名の参加を集めることができ，アンケートから参加者が満足できたことが分かった．

The Report of Visuail Information Processing 2007 Camp

Tetsuyuki MINAMIHARA[†1] and Tomoaki TESHIMA[†2]

This paper is a report of Visuail Information Processing 2007 Camp. This Camp was held from 22nd till 24th of September 2007. The aim of this camp two points, to improve the low motivation against the presentation and to create the networking among the students. During the camp, poster session, oral session, recreation and get-together party was held to create the network amont the students. To boost the networking, a group work was done before the camp among the attendee. English session was held during the poster session to offer an experience of international conference, especially to the students who had few experience of it. From this year, a committee was organized and discussion was done on the internet. As the result, the camp attracted 100 attendee. From the answer of the questionnaire, attendee was satisfied.

1. はじめに

本稿では第7回ビジュアル情報処理研究合宿(VIP2007: Visual Information Processing 2007)(以下，本合宿)の開催報告を行う．本合宿は2001年から毎年行われ，今年度で通算7回目を迎えた．開催地は去年と同じく独立行政法人国立女性会館(NWEC: National Women's Education Center, Japan)で開催された．この合宿では初回から一貫して大学の枠を超えた「人脈作り」というものに重点を置いて行われてきた．今回はそれに加え「発表に対する苦手意識の克服」という目標を掲げ，企画段階から運営委員でそのためのイベント等を考案した．本合宿の主な内容はポスタ発表，希望者による登壇発表，レクリエーションと懇親会，及び合宿前のグループワークである．合宿前のグループワークは今年度初の試みとして行われた．

本合宿は学部4年から博士後期課程の学生94名，指導教官4名と社会人2名の合計100名により，2泊3日の日程で行われた．各大学研究室から参加された人数を表1に示す．昨年までは参加研究室ごとの代表者が運営していたが，今年度は有志による運営委員を募り，各委員が企画・準備を担当した．

2. 合宿概要

本合宿では例年参加者によるポスタ発表と，一部の参加者による口頭の登壇発表，また，親睦を深めるためのイベントとして，レクリエーションと懇親会を行ってきた．今回はそれに加え新たな試みとして

- 合宿前にグループによる事前作業
- ポスタ発表における英語セッション

を行った．表2に本合宿のスケジュールを示す．

†1 九州大学大学院芸術工学府
Graduate School of Design, Kyushu University
†2 慶應義塾大学大学院理工学研究科
Graduate School of Science and Technology, KEIO University



図 1 合宿参加者による集合写真
Fig. 1 Group photo of VIP2007

2.1 参加受付

今年度は合宿の参加受付方法を変更し，個人単位での受付を行った．例年は研究室単位で参加を受け付けており，個人の意思で参加を申し込む場合もあれば，研究室単位での計画的な参加という場合もあった．しかし，本合宿では研究室の枠を超えた人脈の形成というものを重要な趣旨として置いているため，個人として積極的に合宿に関わってほしいと考え，参加受付の方法を変更した．また，今年度の合宿では新たに，後述する事前作業としてのグループワークを行った．そのような共同作業を行うためにも，参加者が積極性をもって合宿に望む必要があり，この変更に至った．

表 1 参加研究室一覧
Table 1 List of participating laboratories

大学名	研究室名	学生	教員
岩手県立大学	伊藤 II 研究室	9	0
お茶の水女子大学	伊藤研究室	15	1
九州大学	鶴野研究室	3	0
群馬大学	太田研究室	1	0
慶應義塾大学	斎藤 (英) 研究室	2	0
静岡大学	三浦研究室	1	0
中部大学	藤吉研究室	1	0
筑波大学	高性能計算 ビジュアルサイエンス研究室	2	0
東京工科大学	ゲームサイエンス研究室	2	0
東京工業大学	中嶋・齋藤研究室	3	0
東京大学	越塚研究室	3	0
	山口研究室	12	1
東京電機大学	齊藤剛研究室	5	0
	ビジュアルコンピューティング研究室	12	2
東京農工大学	斎藤隆文研究室	7	0
東京理科大学	武田研究室	2	0
豊橋技術科学大学	画像工学研究室	4	0
広島大学	知的システム モデリング研究室	2	0
早稲田大学	GITS	1	0
	岡田研究室	4	0
	鎌田研究室	2	0
	森島研究室	1	0
企業からの参加者		0	2
小計		94	6
合計		100	

2.2 グループワーク

今年度の合宿では，合宿中のスムーズな交流の促進を目的として，合宿前に参加者を 4—5 人ずつのグループに振り分け，自己紹介を兼ねたグループワークを行った．グループワークではグループごとに，パワーポイントを用いた自己紹介スライドの作成を行った．ここでは，グループ全員でひとつの流れをもったスライドになるように，協力して添削しあいながら作業を進めていくことで，合宿前の参加者同士の交流を促した．完成したスライドは合宿当日，ポスタ発表の際に上映するため，グループ分けはポスタ発表で同じセッションの発表者同士になるよう考慮した．グループワークでは，グループ内で司会係・編集係・運営委員への連絡係などの係を振り分け，進行状況を運営委員に逐次報告しながら作業を進めるように管理した．また，各グループ用のメーリングリストを用意し，議論や相談などの作業を円滑に進めるための環境を提供した．

2.3 ポスタ発表

合宿の初日と 2 日目には，学生同士でのポスタ発表を行った．本合宿では全員にポスタ発表とその予稿の提出を求めた．まだ研究内容の決まっていない学部 3・4 年生や研究生は，関連研究の紹介を行った．1 セッションあたり 8—12 人を割り振り，50 分の発表時間と 10 分の入れかえ時間を一つのセッションとして計 8 セッション行った．ポスタ発表時には，グループワークで作成した自己紹介スライドを上映した．この自己紹介スライドの上映により，現在の発表者と発表内容を把握しやすくすることを目的とした．また，昨年度のアンケートで留学生から言葉の壁についての意見がよせられていた．そこで今年度は英語セッションを設け，そのセッションでは予稿・発表ともに英語で行った．質疑に関しては日本語での応答も可能として，質問者も参加しやすい雰囲気になるよう心がけた．英語セッションの様子を図 4 に示す．

2.4 登壇発表

登壇発表では参加者の中からの立候補と推薦により講演者を決定した．図 2 に登壇発表の様子を示す．1 件あたり 20—30 分の発表で，他では聞くことのできない実体験に基づいたエピソードを以下の 6 名に講演して頂いた．

- 宮崎氏@ソニー & お茶の水女子大学
- 堀川氏@富士フィルム
- 松村氏@日本電信電話株式会社
- 野村氏@東京大学

- 五味氏@お茶の水女子大学
- 皆川氏@慶應義塾大学

宮崎氏には「社会人ドクタのススメ」と題して，社会人ドクタという道を選んだ経緯や普段の生活の様子などを語って頂いた．堀川氏には学生には馴染みがない，企業での仕事や内情といったことを講演して頂いた．松村氏には学生時代に励んだことと，それがどのように研究・仕事に結びついていったかを語って頂いた．野村氏には「STeLa LeadershipForum 2007」へ参加した時の体験談を語って頂いた．STeLa は国際的なリーダーたり得る素質を会得するための研修を行う合宿で，人脈作りに重点を置いているという点で本合宿の趣旨と通じる点が多く，非常に興味深い発表となった．五味氏には「お茶大生の ON と OFF」と題して，全国的に見ても珍しい理系の女子大学の研究室の内情について話して頂いた．皆川氏には Web サービス「顔ちぇき」を作る過程での体験談を語って頂いた．知名度の高いサービスについての話題だったため，多くの参加者が興味を持って聞き入っていた．

2.5 レクリエーション

合宿 2 日目には，参加者同士の交流を深めるためにレクリエーションを行った．レクリエーションは，男女差・個人の能力差の少ないもので，全員が楽しめることを考慮し企画した．そこで，ウレタン製の柔らかいフライングディスクを用いたドッジボール形式のスポーツであるドッヂビーを採用した．しかし当日は雨となってしまい，予定していたドッヂビーを行うことができなかった．そのため代替案として，グループワークで作った自己紹介スライドの鑑賞会を行い，人気投票をもとに上位のグループを表彰した．

2.6 懇 親 会

初日の夜と 2 日目の夜には参加者同士の交流を深めるために懇親会を行った．懇親会の様子を図 5 に示す．この懇親会は他大学の学生や教員とも打ち解けて話すことができる場となった．この合宿では学部 4 年生をはじめとして，外部での発表が初めてという人も多数参加している．懇親会で親睦を深めることによって，発表への緊張をほぐすことや，活発な質疑応答を促すことができた．

3. 企画・運営

本合宿の企画と運営は例年学生によって行われている．昨年までは参加研究室ごとの代表者が運営していた．一方，今年度は有志で運営委員を募り，合宿の企画・準備にあたった．運営委員は VIP2006[1)2)] の参加者を中心に 2006 年の 10 月から選定していった．運営委員は以下の 9 名である．小田瑞穂 (お茶の水女子大学)，澤野弘明 (早稲田大学)，清水彰一 (中部大学)，高橋智也 (岩手県立大学)，田崎大輔 (早稲田大学)，野村有加 (東京大学)，山澤舞子 (お茶の水女子大学)，南原哲幸 (九州大学) (副代表)，手島知昭 (慶應義塾大学) (総代表)．

3.1 Web 上での議論

選出された運営委員は，北は東北の岩手県，南は九州の福岡県までと全国各地に散らばっている．距離的な制約のため，議論は主に Web 上で行われた．Xoops[3)] を用いた掲示板やメーリングリストを用いて企画を進めた．また，2007 年 2 月に東京で行われたグラフィクスと CAD 研究会や 2007 年 6 月に大阪で行われた VC/GCAD 合同シンポジウムなどでは，参加できた運営委員で直接打ち合わせを行った．

3.2 開 催 地

合宿開催地については，以前から関東以外での開催を求める声が出ていた．特に遠方からの参加者には関東近辺までの交通費が負担となり，関東地区以外の大学からの参加の増加が難しい状況となっていた．そこで 2006 年 12 月から運営委員によって，開催地についての議論がなされてきた．各運営委員が全国各地に散らばっていることを利用し，運営委員が自分の住む地域を中心に全国各地の施設を手分けをして探していった．開催地の選定にあたっては，以下に挙げるものを条件とした．

- 150 人規模の研修室がある
- 30–40 人規模の研修室が 3 つ以上ある
- 100 人が宿泊できる
- 気候的条件（冷暖房完備，標高値，緯度など）

この条件を満たす施設を全国で 50 箇所以上あげて議論を進めた．しかし，最終的には参加者の減少や，地方で開催する方が旅費支援を行う際にコストがかかることを危惧し，昨年同様 NWEC での開催とした．

3.3 グループワークの企画

前回の合宿後の意見で，本合宿の特色となるような



図 5 懇親会の様子
Fig. 5 Get-together party

表 2　合宿中のスケジュール
Table 2　Schedule of VIP2007

時間	7:30	9:00 −11:00	12:00 −13:00	13:00 −14:00	14:00 −15:00	15:00 −17:00	18:00 −19:00	19:00 −21:00	21:00−
22(土)				集合		ポスタ発表	夕食	ポスタ発表	風呂&懇親会
23(日)	朝食	ポスタ発表	昼食	英語セッション	登壇発表	レクリエーション	夕食	風呂&懇親会	
24(月)	朝食	登壇発表							



図 2　登壇発表
Fig. 2　Oral presentation



図 3　ポスタセッション中に自己紹介ムービーを流している様子
Fig. 3　Self introduction movie during the poster session

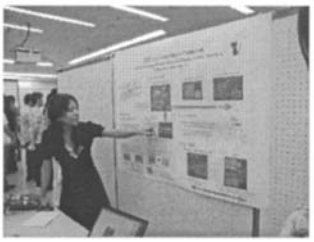


図 4　英語セッションの様子
Fig. 4　English session

企画が望まれていた．そこで，合宿開催前に参加者同士での簡単な事前作業を行ってもらい，合宿当日のスムーズな交流を促進するためグループワークを企画した．内容については 2006 年 12 月頃から議論を進め，2.2 節で述べた自己紹介スライドの共同制作を行うことにした．実際に Web 上での共同作業が可能か確認するために，2007 年 2 月下旬から半月ほどの期限を設け，運営委員の間でこのグループワークを行った．実際にメーリングリストとチャットを用いて作業を進めた結果，いくつかの問題点を見つけることができた．主な問題点として，以下の 2 点があげられる．

- ネットを通しての意思疎通の難しさ
- 研究方針やプレゼンの仕方の違いによる衝突

Web 上では意思疎通が難しく，ときに感情的な発言も見受けられた．これを受け円滑な議論を進めるために，グループごとに対外発表経験の多い学生を司会係として指名し，議論の進行を依頼した．また，作業内容を具体的に把握できるよう，運営委員内で行ったグループワークの経緯と完成したスライドをサンプルとして提示した．

当初はこのスライドの中で研究の概要も紹介し添削しあい，各自の研究の発表能力の向上を図る予定でいた．しかし，研究の進め方や発表のスタイルには研究室ごとの方針などがあり，意見の衝突が予測された．そのため，参加者同士でのグループワークでは，研究内容はタイトル紹介程度に留め，自己紹介が中心となるスライド作りを行った．

3.4　登壇発表の準備と募集

登壇発表についての議論は 2007 年 1 月頃から進めた．今年度の合宿では，「発表に対する苦手意識の克服」を目的の一つとしているため，当初は参加者による研究内容の発表を検討していた．具体的には，下級生に発表の機会を与え，大人数の前での発表経験の場を提供し，上級生には下級生へのアドバイスや発表スライドの添削など発表準備の補助をしてもらうことを考えた．しかし，その企画を通して全参加者の発表能力の向上が見込めるわけではなく，合宿当日までに十分な添削期間を確保できないことを危惧し，別の方向性を探ることになった．そこで，登壇発表では研究発表以外のテーマでの講演を企画した．参加受付が終了した 2007 年 8 月初頭に，参加者用メーリングリストを用いて講演の募集を行った．また，参加者以外に SIGGRAPH 採録者や運営委員の知人など，魅力的な講演が期待できる方にも発表を依頼した．その結果 2.3 節で示した 6 名に講演していただくことができた．

3.5　予　　稿

参加学生にはポスタ発表の予稿提出を義務付けた．当初，CD に記録してのデジタルデータでの配布も検討されたが，合宿にパソコンを持ち込んでいる人以外はポスタ発表前に目を通せないため，紙媒体での配布をすることにした．予稿の形式は A4 サイズ 1 枚とし，文字サイズ以外の制限は設けなかった．周知の徹底と，事前のグループワークを通して参加者同士が声を掛け合うことにより，予稿提出率 99%を達成できた．予稿集は当日に印刷物として全参加者に配布した．

3.6　告　　知

本合宿の告知はメールとチラシを直接配布して行った．メールについては image メーリングリストと CG

メーリングリストに告知メールを送信し，参加者を募った．また，メーリングリストでの告知に先がけ，告知用の Web サイト[4] を立ち上げた．Web サイトでは 4 月から CFP(Call For Paper) を公開した．メールや Web での告知以外にも，運営委員の知人などを直接勧誘し，参加者を募った．

4. アンケート結果と考察

合宿最終日に参加者にアンケートを行った．アンケートは学生用と教員・企業からの参加者用の 2 種類を用意した．その結果，学生 82 名，教員・企業からの参加者 5 名の回答を得た．アンケートの内容及びその回答結果を表 3，図 6，図 7 に示す．数字は回答全体に対するパーセンテージで表わしている．

4.1 学生の回答

自由回答の一部を以下に記す．

- グループワークの仕事量に偏りがあった．

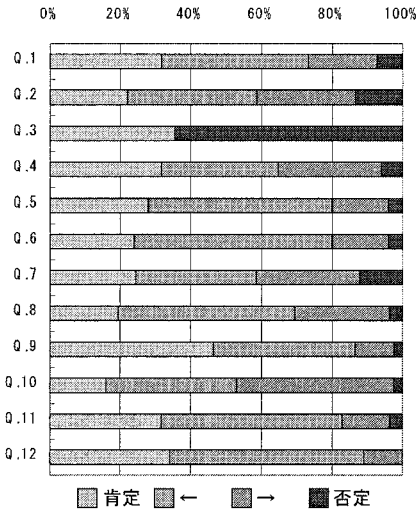


図 6 学生のアンケート結果
Fig. 6 Result of questionnaire from student

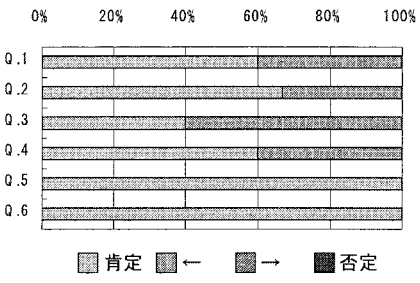


図 7 教員・企業からの参加者のアンケート結果
Fig. 7 Result of questionnaire from teachers and speakers

- グループワークのメンバが同時にポスタ発表するので，メンバの発表を聴くことができなかった．
- グループワークに時間がかかり，自身のポスタに時間を費やせなかった．
- 通常の学会に比べ質疑が行いやすかった．
- 普段なかなか他大の方との交流がないので，良い機会だったと思う．
- 予稿集に白紙のページを何ページかつけてほしい．メモ帳として使えるように．
- 企業に就職している人の話は社会人になる前の準備的に就活を終えてても役立った．
- 就職を決める以前にこのような合宿に参加していたら大学院に進みたいと希望していたと思う．
- 初めて発表する機会だったので良い経験になりました．
- 他大の先生と話ができた．話が合う友人もできた．
- 発表など初めて経験することもあり，他の人の研究も見れて良い刺激になった．

スケジュールに関しては，肯定的な感想が得られた一方，日程が過密すぎる・休憩時間や自由時間をもっと増やして欲しい，といった意見も寄せられた．

4.2 教員・企業からの参加者の回答

教員及び企業からの参加者の回答例を以下に示す．

- 積極的な質疑が多く充実していた．準備側はもう少し研究の出発点を明確にしてほしい．
- (登壇発表について) 学生にとっては先輩の話はおもしろいし，役立つでしょう．
- 他大学のレベル，自己のレベルの確認，交流と目的を達成した学生も多いのでは？
- ポスター発表の時間が短く感じた．
- 全てを見て回るのが難しいので，ポスター発表の前にセッションの発表者に 1 分ぐらいで紹介してもらえるとありがたい．

教員・企業からの参加者の回答では全体的に肯定的な意見が得られた．

4.3 考　　察

アンケート結果から，学生，教員，企業からの参加者ともに本合宿に満足されたことが伺える．新しく導入したグループワークと英語セッションについて同じグループのメンバの発表を聞きに行けない，という不満の声も寄せられたが，概ね好評を得ることが出来た．企画自体に対する不満は少なく，来年度以降の開催に向けて参考にするべきと思われる．登壇発表においては，企業から講演者を招き多くの学生から好評を得た．この企画では，卒業して就職した学生も企業から講演者として合宿に参加することで，人脈を維持できる．

表 3　アンケート結果 (学生用)
Table 3　Result of questionnaire(student)

アンケート項目	肯定 ← → 否定				合計 (人数)
(Q.1) グループの ML での議論に積極的に参加できたか	31.7	41.5	19.5	7.3	100.0(82)
(Q.2) グループ ML の使いやすさはどうだったか	22.0	36.6	28.0	13.4	100.0(82)
(Q.3) 議論にグループ ML 以外の方法を用いたか	35.4	—	—	64.6	100.0(82)
(Q.4) グループワークは事前交流や当日の交流に役立ったか	31.7	32.9	29.3	6.1	100.0(82)
(Q.5) ML での準備は昨年に比べてどうか (昨年の参加者のみ)	28.0	52.0	16.0	4.0	100.0(25)
(Q.6) 研究室単位の申込は昨年以前に比べてどうか (以前の参加者のみ)	24.0	56.0	16.0	4.0	100.0(25)
(Q.7) 自分のポスタ発表の準備、発表はしっかりできたか	24.4	34.1	29.3	12.2	100.0(82)
(Q.8) 他の人の発表について、質問、議論など充実していたか	19.5	50.0	26.8	3.7	100.0(82)
(Q.9) 登壇発表は満足できたか	46.3	40.2	11.0	2.4	100.0(82)
(Q.10) スケジュールは満足だったか	16.0	37.0	44.4	2.5	100.0(81)
(Q.11) 他の大学の学生、先生と交流できたか	31.7	51.2	13.4	3.7	100.0(82)
(Q.12) 合宿全体を通して満足できたか	34.1	54.9	11.0	0.0	100.0(82)

表 4　アンケート結果 (教員・企業からの参加者用)
Table 4　Result of questionnaire (teachers and speakers from company)

アンケート項目	肯定 ← → 否定				合計 (人数)
(Q.1) 学生のポスタ発表の準備、質問回答について	60.0	40.0	0.0	0.0	100.0(5)
(Q.2) 登壇発表は満足できたか	66.7	33.3	0.0	0.0	100.0(5)
(Q.3) スケジュールについて	40.0	60.0	0.0	0.0	100.0(5)
(Q.4) 懇親会・交流会、レクはどうだったか	60.0	40.0	0.0	0.0	100.0(5)
(Q.5) 合宿全体を通して、学生にとって有意義だったか	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0(5)
(Q.6) 来年以降も学生を参加させたいか	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0(5)

この観点からも，来年度以降講演者を企業から招く企画を続けて行きたい．

5. おわりに

本合宿は画像電子学会[5] および情報処理学会グラフィクスと CAD 研究会[6] の後援で行われた．2 泊 3 日の間のポスタ発表，懇親会，レクリエーション，登壇発表および合宿開催前に行ったグループワークによって，発表への苦手意識の克服，および学生同士の大学の枠を越えた人脈作りの場を提供した．また今年度は新しい取り組みとしてグループワークと英語セッションを企画した．運営のために運営委員会を組織し，Xoops やメールで議論を行い，積極的に告知，勧誘を行った．今年度は 100 名の参加を集めることができ，アンケートから参加者が満足できたことが分かった．

謝辞　本合宿を開催するにあたり，後援団体の画像電子学会，情報処理学会グラフィクスと CAD 研究会及び運営に協力頂いた先生方，また助言をしてくださった VIP2006 総代表の澤野氏，副代表の小田氏に深謝の意を表す．

参考文献

1) 澤野弘明，小田瑞穂:“ビジュアル情報処理研究会学生研究合宿 2006 の開催報告”，画像電子学会誌，Vol.34，No.6，pp. 914–919(2006-11)
2) 小田瑞穂，澤野弘明:“人脈作りを重要視した VIP2006 の開催報告”，情報処理学会研究報告，グラフィクスと CAD 研究会 (NTT-AT 本社/新宿区)，2007-CG-126，pp. 55–56 (2007-2)
3) “xoopscube.org - simple : secure : scalable”: http://xoopscube.org/
4) “VIP2007”: http://itolab.is.ocha.ac.jp/vip2007/
5) “画像電子学会”: http://wwwsoc.nii.ac.jp/iieej/
6) “情報処理学会グラフィクスと CAD 研究会”: http://www.okada-lab.org/GCAD/index-j.html



南原　哲幸
平成 19 年九州芸術工科大学芸術情報設計学科卒業．同年九州大学大学院芸術工学府博士前期課程進学ビジュアルシミュレーションに関する研究に従事．



手島　知昭
平成 17 年慶應義塾大学理工学部情報工学科卒業．平成 18 年同大学理工学研究科修士課程修了．現在同博士課程に在学中．車載システムにおける画像処理の研究に従事．